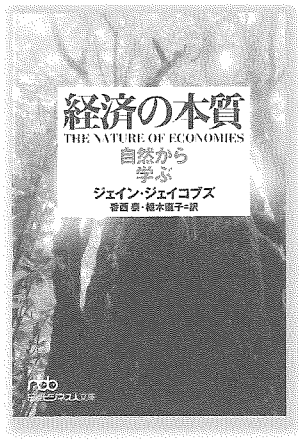

経済の本質 ―自然から学ぶ―

ジェイン・ジェイコブズ著　香西泰、植木直子訳
日本経済新聞出版社 2013（日経ビジネス人文庫）

商学部准教授　植田　敦紀

タイトルは一見重厚な学術書のようである。本屋にはこのような学術書が数多並んでいるがあまり手に取ることはないかも知れない。しかし本書はとてもコンパクトで持ち運び便利な文庫本である。しかも話の展開は想像上の登場人物の対話による文学形式を用いている。それにより読者を誘い登場人物と交わり議論に入らせることによって研究の思考を広げ議論を発展させる。そして、こんなに薄っぺらい本であるが、1冊読み終えるまでに生物学、進化論、生態学、鉱物学、気象学、そして経済学と、多方面からのアプローチにより思考回路がフル活動する。

本書を通じて一貫して流れているテーマは、人間はあらゆる面で自然秩序の一部分としてすっぽりと自然の中に収まって存在しているということだ。この自然と人間の統一性を受け入れることは、人間は自然秩序への介入者だと想定している生態学者には受け入れがたい。また、理性、知識、そして決意が、人間に自然秩序を回避させ、出し抜くことを可能にすると想定する経済学者にも受け入れにくい。

一般には、生態学者と経済学者は開発反対と賛成を巡って厳しく反目しあっているように見える。著者はこれに対して、生態学 ecology と経済学 economics は英語表現で語根を共有していることに示唆されるように、両者は双子として共通の問題を取り扱っていることに読者の注意を喚起している。生態学が生まれたときには、それは「The Economy of Nature 自然の経済」を研究するものとされていた。著者ジェイコブズはそれをひっくり返し「The Nature of Economies 経済の自然（本質）」（本書のタイトル）とした。そこには、今度は経済学が自然から学ぶ番だという意味が込められていよう。自然は征服すべきものと考えると、自然資本の成長率は極度のマイナスになる。経済の発展、成長、安定は自然の法則に従うもので、それを自覚することによってのみ人間は自然とよりよく調和しつつ経済を営んでいける、というのが本書のメッセージである。